

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑫

土肥いつき

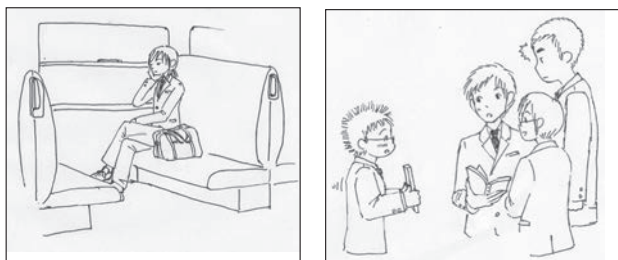
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

多様性ワークショップの紹介

高校の人権学習は、限られた時間の中でさまざまな人権課題を知ってほしいという思いから、総花的な内容になってしまいがちです。一方、人権教育を進めるために、「普遍的な視点」と「各人権課題の視点」のふたつのアプローチからとりくむことが必要であるとも言われています。前号と前々号でとりあげた「世界人権宣言」についての授業は、まさに「普遍的な視点」からのアプローチです。そして、2学期以降は、どちらかという「各人権課題の視点」が中心となります。

ただ、わたしは「普遍」と「各人権課題」は「あれかこれか」の関係ではないと思っています。例えば、世界人権宣言の授業でも「普遍」を考えるために、ストリートチルドレンやホームレスといった、個別の人権課題をとりあげています。逆に、各人権課題を学ぶことを通して、普遍的な視点が得られるとも考えています。そして、それらをつなぐキーワードが「多様性」であると考えています。そこで、わたしの勤務校の1年生の人権学習では、4月の世界人権宣言の授業に続いて、6月にオリジナル教材である「多様性ワークショップ」をおこないます。

この授業では、下の例のような絵が紙の両面に描かれた14枚のカードを使います。



それぞれのカードには絵があるだけで、説明はありません。ちなみに、このカードは「ひとりでいたい／みんなでいたい」です。他に「右利き／左利き」「女の子／男の子」「ネコ好き／イヌ好き」「自分が好き／自分が嫌い」「マニア／マニアじゃない」「靈感がある／靈感がない」「時間を守る／時間が守れない」「空気を読まない／空気を読む」「ついしゃべってしまう／寡黙」「メガネ／裸眼」「市内出身／市外出身」「電車通学／徒歩通

学」「聞き役／しゃべり役」といったカードがあります。なお、このカードのイラスト作成にあたっては、中学校で美術の教員をされている友人の青丹ゆきさんに協力していただきました。

生徒にはこれらのカードを1セット配布します。また、担任は黒板に貼りつけられるように大きなカードを持っています。配布したら、1枚ずつカードの説明をしながら、例えばさっきの例で言うなら「わたしは、どちらかという「みんなといたい」やなあ」などと言いながら、自分のカードを黒板に貼ります。同時に、生徒たちにも「どちらかというところら」という面を選んで机の上に置いてもらいます。これを繰り返します。ワークそのものはこれだけです。

14枚すべてについて繰り返すと、全部で $2^{14}=16,384$ 通りになります。例えば、10枚だけやったとしても $2^{10}=1,024$ 通りになります。このワークはクラスごとにおこなうので、1,000通りを越すパターンがあれば、すべて同じになることはほとんどありません。まさに、クラスの中の40人ですら多様であることが、カードによって可視化されます。

ただし、このワークの大切さはこのあとにあります。それは、多様さの間に権利の不平等があることを示すことです。例えば、「左利き／右利き」のカードをとりあげ、クラスの中にいる左利きの生徒にインタビューします。すると、駅の自動改札機で不便したり、ハサミを使いにくかった経験を語ってくれます。それを聞いた右利きの生徒は、それまで知らなかった友だちが感じる不便さに驚きます。また、左利きの生徒自身もそれが当たり前だったので、自分が不便していたことに気づきます。そこで、「なぜこのような不平等が起こるのか」ということを問いかけます。そのことを通して、多数者向けの社会が少数者に不便を強いていることが可視化されます。さらに「それを解決するにはどうすればいいか」ということも考えてもらいます。

他のカードの使い方や、その後の展開、また、このワークを思いついた経緯は次号に書くことにします。